スローな街のための コミュニティ・デザイン

～「ハコダテ・スローマップ」をめぐる実践～

渡辺　保史（わたなべ　やすし）
node0138プロジェクト代表

はじめに

「ハコダテ・スローマップ」という、一風変わった名前の地図をつくり始めてから1年半が経つ。夜景と坂道と旧い街並みで全国的に知られる観光都市・函館の姿を、普段とはちょっと違った視線から眺め、この街に隠れた価値を再発見するための地図・スローマップ。なぜ、こうした地図をつくろうと思い到ったのか。どのようなやり方でこの地図をつくったのか。この地図づくりの活動が地域にとってどんな意味を持つのか。以下の小論ではこれらの問いに一つずつこたえていきたいと思う。

スローマップとは何か？

まず最初に、ハコダテ・スローマップとはどんな地図なのかを、簡単に説明しておこう。2003年3月に、初めてバージョン1.0（試作版）として公開したマップは、紙の印刷版とインターネット上のウェブ版の2種類。印刷版の方は、A2サイズの再生紙に化学物質を使わない大豆インク印刷で5000部を発行。市内の観光案内所やカフェ、あるいはイベント時に無料で配布してきた。印刷版と同じ内容を掲載したインターネット版は、画面上で地図の拡大や縮小、カテゴリーごとの情報の切り換えなどを対話型の操作でできるシステムを採用し、全国どこからでもスローマップの情報にアクセス

できるようにしている。掲載している範囲は、試作版ゆえ函館市全域まではカバーしていない。観光エリアとして多くの旅行者を集める函館山麓の西部地区を中心に、JR函館駅前周辺までの、いわゆる旧市街地。この中にある、およそ200カ所の場所の情報を盛り込んだ。

これらの情報は、以下に示すような、全部で5つの大まかなカテゴリーで整理している。

自然と親しむ＝都市の中に残る自然や、景観を楽しむための場所など

スローライフ＝環境にあまり負荷をかけないライフスタイルを送るために必要なお店など

スローな移動＝公共交通機関のアクセスポイントや、散策するのに最適なルートなど

歴史と文化＝文字通り、街の歴史や文化に触れられる場所や街並み

環境を考える＝環境が悪化していると思われる場所

以上5つのカテゴリーの情報は、アイコン（絵文字）によって地図上に視覚化している。アイコンは、「Green Map System」（グリーンマップ・システム）という、世界規模で取り組まれている環境マップ作成のNGO活動によって定められた世界共通規格のものを採用した。つまり、ハコダテ・スローマップは、このグリーンマップの函館版という位置づけになるわけである。

グリーンマップのアイコンは、「公共の森と自然」「名木」「貴重生物」「リサイクルショップ」「夕日がきれいな場所」「太陽エネルギー利用施設」「安らぎの場所」「代替燃料乗り物」「重要建築物」「ごみの多い場所」など、全部で125種類が定められており、これらのアイコンの所在を地図上で確かめ、その意味を知ることによって、地図を見た人は、地域に残された貴重な自然環境や、サスティナブル（持続的）な暮らしを送っていくのに不可欠な生活・文化の環境の在り処を理解していくことになる。

グリーンマップのアイコンには版権があるため、これを使うにはニューヨークにある本部に申請・登録する必要がある。これによって、自分の地域でこのアイコンを使ってマップをつくるマップメーカーとなることができる。ちなみに函館は、マレーシアのクアラルンプールについで世界で201番目に

登録されたグリーンマップのプロジェクトとなり、北海道では函館のほかに札幌や旭川、道内全域の花や緑をテーマとしたプロジェクトも進行中と聞く。

このように、スローマップ＝グリーンマップとは、人間をとりまく「環境」―自然環境だけではなく、文化や生活に関わる環境、さらには環境悪化の状況まで含めて―を、地域社会の中で個別的・断片的に捉えるのではなく、全体的な関係性のもとで捉え直すための道具、ということができるだろう。

地域に根ざした情報デザインの可能性

そもそも、函館でこうした地図をつくろうと思ったキッカケは、1999年に遡る。この年の秋、東京で開催された「情報デザイン」に関する国際会議に参加した私は、グリーンマップの発案者である女性デザイナー、ウェンディ・ブラウアーの発表を見聞きして、少なからぬカルチャーショックを受けた。情報デザインとは、インターネット上のウェブサイトの構築や、公共のサイン（案内）システム、コンピュータの操作環境（インターフェイス）の改良など、専門的で高度な知識と技能を必要とするプロの領域だ―そんな先入観を抱いていた私にとって、グリーンマップのやり方は、まさに意表をついていた。地域社会に暮らすごく普通の、だが自分たちの暮らしをめぐる環境については高い意識を持った人々が、ふだんは見過ごしがちな街の環境のよいところや悪いところを発見しなおし、みんなでその情報を共有して、よりよいコミュニティへと変えていくための指針として、協働しながら地図をつくる。自分自身の中ではあくまでも仕事として捉えていた情報デザインという領域が、このグリーンマップが示してくれた発想と手法によって、自分のプライベートな暮らしや地域コミュニティの問題と一気につながった気がしたのだった。

すでにその頃、私は家族とともに東京から函館近郊に移り住んでいたが、まだ十分に自分達と地域社会との距離感を埋められないでいた。だが、グリーンマップを糸口に「地域コミュニティに根ざした情報デザイン」という新しい視点を掴んだことで、自分なりの新しいプロジェクトを立ち上げてみた

い、という想いがふつふつと湧いてきた。

その後、2000年に「node0138」という函館の地域活性化をめぐる様々な問題をオンラインで議論する場（メーリングリスト）を主宰するようになり、そこで多くの人々との出会いが生まれ、着実にプロジェクトを進めていくための地固めをしていった。

具体的に物事が進展するのにさほど時間はかからなかった。2001年の暮れに北海道庁から地域の情報系SOHO（スモールオフィス/ホームオフィス）の支援策に関する相談を受けたのを機に、自分を含むSOHOのチームを組み、ふだんの仕事の枠組みとは離れた形で自分たちの仕事のノウハウやスキルを地域に活かすプロジェクトとして、グリーンマップの制作に着手することになった。制作にかかる事業資金は道庁からの補助金と、いくつかの民間助成金を加えて何とか確保し、準備に取りかかったのは2002年の夏だった。

プロセスをじっくり育てていく

プロジェクトには地元で印刷出版関連のコンサルティングを手がけるビットアンドインク社、地域情報サイトの構築や運営を行っているディッシュグラフィックス、インターネット関連のビジネスからイベントプロデュースまで幅広く手がけているマルチメディア・アンド・ネットワークサービス社という3つの組織からコアメンバーを募った。

実制作に入る前に、コアメンバーに共有してもらいたかったのは一点。コアメンバーだけの閉じた独善的なプロジェクトにはしたくない、いや、そもそものグリーンマップが持っていたコンセプトから言っても、地域の人々に開かれた参加型デザインの手法で進めることは必然だろう、ということだった。

半年にわたって、スローマップのプロジェクトでは、様々な市民の参加と体験の場をつくっていった。まずは、どんなことをするのかイメージを明確にしていくために世界中のグリーンマップの展示と、小学生からシニアまで様々な市民が徒歩で街の再発見し、見つけてきたことを共有するフィールドワークを2002年10月に実施した。その年の暮れには、具体的にどんなマップをつくるのか、内容と表現と活用の

側面から方向性を固めていく公開ブレーンストーミングを行い、年が明けて1〜2月の週末は、僕らコアメンバーとボランティアの大学生グループで掲載コンテンツの整理や検証に明け暮れた。

さらに2月初めには、グリーンマップの共通アイコンに加えて函館独自のアイコン作成のため、小学3年生70人にアイディアスケッチを描いてもらい、マップが何とか形になった3月末には、できたマップの評価と改善と、今後の活用のためのアイディアを出してもらうワークショップも行った。

これらの過程に関わってくれた人々は、実にのべ150人を超える。これらの人達の参加・協力がなければスローマップは実現しなかった、と言っていいだろう。少数の専門的なスキルを持ったスタッフワークの方が作業も速く進むし、間違いはないだろう。とかく多数の人々の想いをうまく結集するというのは、キレイごとではなく骨が折れる作業の連続だ。だが、仮にも「スロー」（ゆっくり、じっくり）を標榜している以上、この参加と体験のプロセスを端折るわけにはいかない。私達にとって、マップづくりはある意味、口実であって、むしろこの活動で出会う人とのつながりや、そこから派生していく新たな活動の先にあるものに、とても興味があるのだ。

地域コミュニティの再生へ向けて

実際に出来上がったマップは、率直に言えば、デザイン的な完成度や掲載情報の密度、あるいは使い勝手といった点で、本来やりたかったことの半分も出来ていない。こうした新しい試みは、まずは「つくってみなくちゃ分からない」という面もあり、今回「試作版」とうたっているのはその所為でもある。

だが、一方でこういう風にも考えている。スローマップというプロジェクトは常に、「ワーク・イン・プログレス」（未完）の活動なのであって、街が時代とともに変化している（つまりは生きている）のと同じように、マップもともに進化していくための第一歩を踏みだしたに過ぎないのだ、と。

実は、スローマップとは、単なる入口に過ぎないのかもしれない。むしろ、私達が志向すべきのは、スローな進化をとげていく地域再生プロジェクト、

とでもいうような活動なのかもしれないと思い始めている。

スローマップを手がけてみて分かったのは、地域にまつわる情報が今まではバラバラになっていて、暮らしをめぐる環境の全体像を住んでいる人自身が描けていない、という問題だった。それはすなわち、人や活動が繋がっているようでいて繋がっていないことに起因していたのではないか。だとすれば、スローマップのプロジェクトの今後の活動も、こうした繋がっていないことを繋げていき、よりよい関係へと組み換えていく「関係のデザイン」とでもいうような領域へと進んでいくことが課題になってくる。

実は、そうした意味での試金石の一つとなったのが、2004年2月14〜15日に函館市と民間のいくつかの地域活動団体の共催で行った「ハコダテ・スミカプロジェクト」というイベントであり、この企画と運営にスローマップチームの一部が参画した。これはもともと、国の都市再生の動きと連動したもので、函館の西部地区（主に都市景観形成地域）の街並み再生をテーマに、将来へ向けた再生提案を子供と大人が一緒にチームを組んでつくりあげるワークショップを中心として、硬軟様々なプログラムを展開した。

今までのまちづくりやまちおこしの企画というと、型通りのシンポジウムや一過性の集客イベントが多かったが、今回のプロジェクトでは、地域の中でそれぞれ個別に活動している団体や、さらには将来を担っていく子供たちという「異分野・異世代」をつなげ、さらには西部地区に暮らす人を主人公にした未来のストーリーを現場に根ざした形でデザインしながらつくりあげていくという、従来にない参加と体験の手法を実践してみた。

このようなやり方は、まさにスローマップで培った、多様な人々の知恵や経験を繋げ、プロセスをじっくりと構築していく手法そのものである。運営上の細かな課題は多々あったものの、ワークショップのような参加と体験にもとづく新しいやり方を、地域に根づかせるための第一歩を踏み出せたのではないかと個人的には評価している。

みんなで育てて、進化するマップの先に

さて、肝心のスローマップ自体であるが、この2004年春にはようやく、

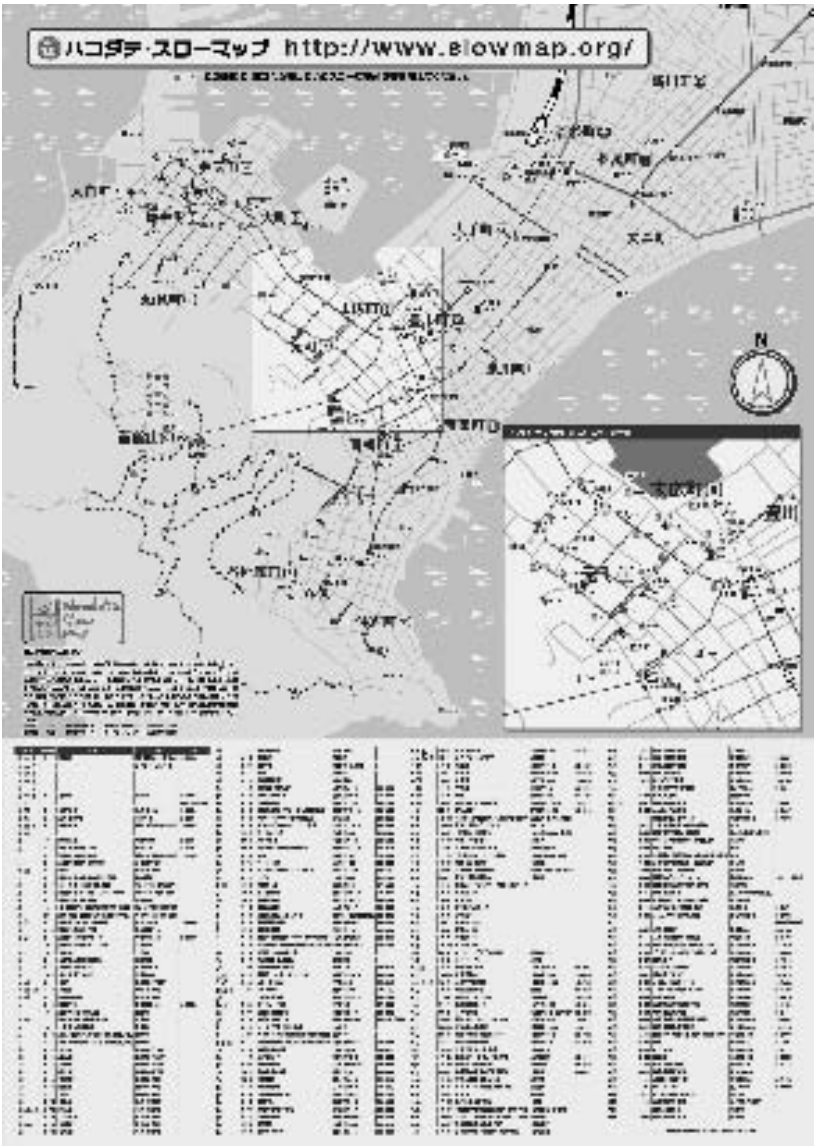
インターネット版の新しいバージョンを公開できる見通しである。新しいバージョンは、私（渡辺）が別の仕事で関わっている「コミュニティウェア」（地域コミュニティの人々同士で知恵を共有するための情報システム）の研究開発プロジェクトの一環で開発中のシステムを組み込んで、スローマップを言わば実験台にして運用するものだ。

この新しいシステムでは、作り手側からの一方的な情報提供ではなく、多くの人々の間で自発的・積極的に情報が投稿され、それらの情報同士の関係性も見えてくる「進化するマップ」となる。言ってみれば、オンラインでいつでも街並み発見のワークショップを行っているような、そんな雰囲気のサイトになっていく。

一人ひとりが知っている「スローな場所」の情報が次第に蓄積され、それらの繋がりが見えてくれば、その内容を再編集して新たな印刷版のマップを出版することもできるようになる。今まではバラバラだった個人の知恵が結びつくことによって、従来の商業的な観光ガイドやタウン情報誌にはなかった、もう一つの函館の姿がそこから浮かび上がっていくことはおそらく間違いない。そしてまた、これらの情報は、新しいまちづくりへ向けて人々が何らかの発見をしたり、気づいたりすることを促す触媒のようなものになって欲しいと思う。

歴史が息づいた伝統的な街並みのすぐ傍に、函館山の豊かな自然が寄り添い、一方で経済的にはまったく停滞しきって活力をうしなったスローな街、函館。いいところと悪いところがないまぜとなったこの状況の中で、希望があるとするなら一体何だろうか？　私なりに最近思うのは、英語の2つの接頭辞──「co－」と「re－」を結びつけたところにそれはあるということだ。コミュニティやコミュニケーション、コラボレーション（協働）、あるいはリデザイン、リノベーション、リサイクル、リボーン.....強引にまとめ上げれば、こんな風に言えるかもしれない。「地域を再生するためのデザインを、ともに進めていく」──このプロセスを、じっくり腰を据えて手がけていくこと。それが、スローマップという未完の営みに課せられたミッションだと痛感しているところである。

渡辺保史（わたなべ・やすし）
1965年生まれ、函館市出身。大学卒業後、新聞記者を経てフリーランスのプランナー、ライターとして活動。著書に『情報デザイン入門　インターネット時代の表現術』（平凡社新書）など。現在、「未来のコミュニティ」をテーマとした研究開発事業体・智財創造ラボの主任研究員、NPO法人ヒューマン・センター・デザイン・イニシアティブ理事などを務める。
メールアドレスinfo@nextdesign.jp


ハコダテ・スローマップ http://www.slowmap.org/
N

『スローハウス』
～「民家再生」「古材利用」の視点から新しい北海道の家づくりの提案～

武部　豊樹（たけべ　とよき）
武部建設株式会社代表取締役

1　はじめに

「スローハウス」とはどのようなものを指していうのだろうか。今のところ、明確な概念があるとは思えない。それは、1986年北イタリアで始まった「スローフード運動」に触発されて語られている「スローライフ」という言葉、そこに含まれている「家」と「暮し方」のひとつのイメージであると思われる。

「ファーストフードからスローフードへ」。食の世界で提唱されているこのスローガンは、現代社会を見直す重要なキーワードであるだろう。私はここで、当社が展開してきた「民家再生」「古材活用」の事業活動の中で、経験し、考えてきたことを振り返りながら、スローライフの重要な部分を構成するであろう『スローハウス』というものをイメージしてみたいと思う。そしてそこから、これからの北海道の「新しい家づくり」の方向と具体的なモデル像を考えてみたいと思う。

2　民家再生とは

(1) 経緯

当社が民家再生、古材活用を事業として取り組み始めたのは1999年、今から5年前のことである。この間、マスコミをはじめ行政、一般市民の方々から様々な反応があった。それらはおおむね好意的であり、同時に社会的ニーズの変化を感じさせられるものであ

った。そしてこのことは、今まで表面に出てくることが少なかった「住」に対する新しい欲求が、具体的表現を求めて確実に広がりつつあることをも、また感じさせた。それは取りも直さず、現状の家づくりに対する問題と課題がいかに大きなものかをも表している。

(2) 民家再生のきっかけ

① 解体～住む側の問題

具体的に話を進めてみよう。

民家再生のキッカケは、ほとんどの場合、解体である。そして、解体に至る経緯はおおよそパターン化している。老人が夫婦、あるいは一人で、寒く古い民家で暮らしている。子供達は都会に出て戻ってくる可能性はない。

廃屋となった民家

都市で暮らす若者にとって、古い民家はただ単に「寒い・暗い・不便」の代名詞である。結局、老人達は屋根の雪下ろしや修繕など、家の管理もできなくなり持て余した結果、解体の道を選択することになる。

しかし、多くの場合、現在まで残されてきた民家は、立派なものが多いし、代々大切に手入れされてきたものである。また、そこには、本州各地から北海道へ渡って開拓入植して以来の家族、地域の歴史が色濃く残っている。三代前のおじいちゃん、おばあちゃんがどのような苦労をしてこの家を建てたのか、どこの山からどんな木を伐りだしてきたのか、屋根の茅はどこから集めてきたのか、大工はどこの出身か、そして、出来上がった時の誇らしげな喜びまでもが言い伝えられているのである。

② 解体～つくる側の問題

それらが何故、今日に至るまで顧みられることなく、壊され続けてきたのか。それは民家に住む側だけの問題ではなく、家をつくる側、すなわち我々、プロとして建築に関わる側の問題も、一方の大きな原因なのである。

それは、戦後60年にわたって続けられてきた家づくりのやり方にある。特に、高度成長期を経て、大量生産、

大量販売、大量消費の産業構造が、本来一棟一棟ていねいに現場でつくり上げるべき家を、「商品として売る家」にしてしまったのである。それは住宅産業と位置付けられて、社会の様々な制度もまた、それを支える構造として機能してきた。私達の暮しもまた、そのような住宅にあった暮し方になってきた。すなわち、「ファーストフードの暮し」である。そして、つくる主体は地域の工務店から全国規模のハウスメーカーに移り、その経営規模がつくる量とスピード、売る量を規定するという、自動車や家電産業と同じ構造になってしまったのである。

結果として、日本の住宅は20～30年のサイクルでつくっては壊すことになっている訳である。

(3) 民家再生の問題点～費用と大工

さて、民家再生である。

入口は解体であるが、ここには二つの側面がある。

一つは、費用の問題である。再生あるいは古材の有効利用を前提に解体するためには、機械だけで行う訳にはいかない。熟練した大工による手作業が必須条件である。そのための費用の増

人力による解体

加分を誰が負担するのか。これは最終的には利用者が負担することになるが、タイムラグがあれば事業者が一時的に負担することになる。

もう一つの側面は、古民家の解体を担う大工の問題である。大工の技能の問題は、伝統的軸組工法による民家の解体再生において、象徴的に現れてくる重要な問題である。現在の住宅産業の生産過程で、大工の技能、技術が低下してしまっていることは周知の事実である。千年以上の時の流れの中で蓄積し深められてきた日本の大工の技術体系は、それを継承していく大工がいてこそ、次の世代へと引き継がれていくものである。古民家を再生するにあ

たり、最も中心になるべき職人は大工であるということを考えるならば、このことは非常に憂慮すべき問題である。

(4) 古民家のよさ

一方、昔も今も大工の最も良い勉強の場は解体である。古民家というお手本を解体する中で、全てを学ぶことができる。ここにおいては、問題と解答が一体となっているのである。

大切に住み継がれた民家

日本の伝統的民家は、長い歴史の中で無駄をそぎ落とされ、構造的にも、使う材料の面でも、シンプルで実に洗練されている。それがそのままデザインの美しさにもなっている。ある面では、長い時間をかけて合理化され、平面プランもパターン化されている。各地域それぞれの暮し方や日常の生産様式を反映した、現代でいうところの企画住宅のようなものでもある。そのように各地域の自然環境の中で、それぞれのバリエーションをもって特色ある民家として定着し、その地域の景観を形成してきたのである。

一軒の民家を建てる過程も、現代の住宅生産と比較すると異なる部分は多い。まず、時間をかけて良材を選ぶこと、良い腕の大工に依頼すること、そして、最低でも一年、長ければ三年に

民家再生現場で大工と一緒に

もわたって建てること、その間、家族も総出で手伝い、大工はその家に住み込み、その家庭の暮し振りを見ながら家づくりを進めることができる。当然、家を建てることは、その一族にとって大事業であり、お金も相当かけるのであるが、その代わり世代を越えて住み続けることになるのである。

そんな民家のありようが、戦後の社会・経済構造の変化の波に飲み込まれて消え去ろうとしているのである。

(5) 北海道の民家の特長

ここで、北海道における民家の特長を確認しておく必要があるだろう。北海道のこれからの家づくりに、そのことが参考になると思うからである。

まず、ここでいう「民家」とは、おおむね明治の開拓期から戦前までに建てられた、伝統的軸組工法による「農家住宅」をイメージしているということを確認しておきたいと思う。もちろん、これ以外に、商家やニシン漁場独特の大型漁家、あるいは開拓時代の洋風木造住宅等もあるが、ここでは、一応代表として、上記の本州各地の地方色を持つ農家住宅を念頭に置きながら、話を進めていきたいと思う。

まず第一の特長、それは使用されている木材にあると思う。本州と比較すると、道内に現存する民家は、格もそれ程高くはないし、規模も大きくはなく、どちらかというと貧しい部類に入ると思われる。しかし、同じレベルの民家を比較するならば、圧倒的に良材が多いと思う。田畑の開墾を行う過程で、豊富な原生林の中から広葉樹を主とした原木を選び出し、時間をかけて切り込んで使ったものと思われる。現在では、家具材等に利用されているものも多く、樹種は、タモ、カツラ、ミズナラを主に、セン、エンジュ、キハダ、サクラ、オンコ、カバ、カエデ類など多種多様な木材を、構造材や仕上げ材に適材適所、使っていったのである。(座敷まわりには白木文化の伝統なのか、エゾマツ等、針葉樹が使われている例が多い。)

第二には、残されている民家の数が非常に少ないということ、そのほとんどが大幅に改造されているか、住宅が納屋として使用されているなど、本来の姿をとどめていないもの、あるいは廃屋となってしまったものが多いということである。このことは、本州の「夏を旨とした」民家のつくりが、北海道の厳しい気候風土に合わず、改造を繰り返されたか打ち捨てられてしまったからであろう。また、やはり開拓期の北海道は貧しく、豊かな農家の数は少なく、当時においても立派な民家は少なかっただろうということである。

第三に、北海道の民家は、開拓者の出身地である本州各地の特色をそれぞれ持ち、それがお互い大きな影響を受けることなく道内に併存していたということである。(富山県や福井県など

の建て方や民家の特色がそのまま残っている例がある。）このことも、歴史が浅く、全国各地から開拓者を受け入れた北海道の特色であろう。

3　民家再生の意義

このような特長を持つ民家を再生するにあたり、「民家再生」の今日的意味と可能性を今少し考えてみたいと思う。

民家再生の意義は多面的である。そこには、伝統工法、技術技能や自然素材を含む建築的側面、建設廃棄物のリユース・リサイクルという環境的側面、地域・家族の歴史などを含んだ文化的側面、そして時間と効率に追われ、かつてあった日本人の暮しの中の大切なものを失いかけている現代の私達に、人間らしく暮らす生活のリズムを思い出させてくれる、そんな目に見えないがとても大切な精神的側面もある。

民家を再生するということは、まず解体する過程で、ハードとしての建築の成り立ちを学ぶことであり、更に、そこに痕跡として残る人々の暮しを、現代を生きる私達のあるべき生活に合わせて再構成することでもある。ということは、デザインと機能性を高めながら、伝統工法の良さを核として構造を強化し、今後、更に百年ももつような建物とすることである。そして、そこで住まう人々の暮しが一体となって初めて、民家は再生されたことになる。

このように、ハードとしての再生された民家、そこで営まれるスローライフ、この総体が私にとっての『スローハウス』のイメージである。

4　北海道の現代民家モデルの提案

続いて、新しい北海道の家づくりの提案として、「現代民家」モデルの考え方と、それを構成する重要分野とそのキーワード、それぞれの検討項目を提示してみたいと思う。

(1) 現代民家モデルの考え方

最初に、北海道の現代民家の考え方を次のようなものと仮定してみる。すなわち、「現代民家」とは、北海道の開拓の歴史と地域の自然環境を踏まえ、伝統工法をベースにデザイン性、機能性、耐久性を高めた自然派住宅とする。（このような住宅のモデルは、

現在、全国各地で同じような主旨での取組みが行われている。）

(2) 重要分野とキーワード

重要分野とそのキーワードは次のようなものが考えられる。

①デザイン：「すっきり・さっぱり・洗練」
②素　　材：「自然・健康・安全」
③工法･構造：「骨太・頑丈」
④温熱環境：「あったか・さわやか」
⑤伝統技能：「手の記憶を次の手へ」
⑥生産ｼｽﾃﾑ：「合理化と手仕事の融合」
⑦物　　語：「語り継ぐ」
⑧価　　格：「坪単価から時間単価へ」
⑨外部環境：「敷地全体をデザインする」
⑩推進組織：「民・学・官一体」

以上であるが、各分野は重なり合う部分もあり、またこれ以外にも実物モデルの展開の過程で別途検討すべきものも出てくると思われる。

(3) 各分野の検討項目

次に、各分野における具体的検討項目については、以下のようなものがある。

① デザイン
○土間空間など中間領域の取り入れ
○縁側等和風空間の開放性の確保
○内外部の真壁仕上　○自然素材の色使い　○平面プランのパターン化
○モダンかつクラシックな全体のイメージの確立　など

② 素材
○道産木材の活用（乾燥材であること）　○伝統的自然素材　○使用材料のトレーサビリティ（地産地消と材料の地域間交流､さらに国際交流）

③ 工法・構造
○伝統軸組工法の法的チェック
○構造上、防火上の工夫　○軸組断面の割増（大黒柱・通し柱・胴差・梁・土台等）

④ 温熱環境
○高断熱高気密化と換気・暖房のバランス　○調湿　○蓄熱体の利用
○自然エネルギーの利用　○室内気候という考え方（水と植物の利用を中心として）

⑤ 伝統技能
○職人の確保　○技能の継承　○職人の育成システムの検討

⑥ 生産システム
○直営生産方式と多能工生産

○分離受注の可能性　○部分的セルフビルド方式の活用　○顧客の直接買い付けによる支給品の受け入れ

⑦　物語

○家族・地域の歴史を取り入れる　○素材・部材の履歴の付加価値性　○スローライフの展開

⑧　価格

○積算書の透明性・納得性　○積算体系の整備　○「時間単価」の考え方　○「競争力ある」価格

⑨　外部環境

○敷地全体の計画　○雪処理　○雨水利用　○地域の景観（街並、村並）への貢献　○自然環境から地球環境への配慮

⑩　推進組織

○民間の自立的実務型組織の形成　○民・学・官の縦断的横断的協力体制の確立　○他地域とのネットワーク型情報交換・協力関係の構築

このような事柄をできるところから手をつけ、各分野での研究成果を逐一取り入れながらひとつのモデルをつくり上げ、実際に施工過程から公開し展示すること、そして一定の展示期間の後、分別解体し、移築再生を試みる。そこで、リユース材と廃棄物の量を調査することにする。その実践の中から、次の課題が見えてくるだろうし、新たな社会の要求も生まれてくるだろう。また、それを察知することができるだろう。

当社の古材ギャラリー（ストックヤード）

私達は現在、戦後60年の住宅建築の成果と、その反省を踏まえて、今後百年の家づくりの方向を定める時期にきているのである。

5　おわりに

最後に、スローハウスの夢をひとつ。

歳はとっているけども、腕に自信のある職人達と北海道型現代民家を建てること。ゆっくりと時間をかけ、オーナーの家族と一緒に。材料を共に買いに行き吟味し納得して使うこと。近くの学校の子供達も現場に呼んで、昔の体験を語り、将来の夢を聞く。コツコ

民家再生のモデルの内観

ツと確実に家をつくり上げる。そこに住まうという目的と、家をつくるそのこと自体の喜びのために。

参考資料
1）武部建設㈱ホームページ
URL：http：／／www.tkb2000.co.jp／takebe／
2）「月刊アイワード」2000年4月号
武部豊樹「民家の資源と文化を伝える民家古材ネットワーク」
3）平成13年度北方型住宅地域セミナー報告書　檜山支庁経済部建設指導課発行武部豊樹「これからの北海道の家づくり」
4）センターリポート　Vol.32 NO5
通巻140号2003年1月（財）北海道建築指導センター発行　武部豊樹「民家再生で見えてきたこと」
5）空知支庁発行　2003年3月「木の良さ再発見（古材の再生）事業検討委員会報告書

北海道のスローフード

長尾　道子（ながお　みちこ）
食農わくわくねっとわーく北海道事務局長

はじめに

何年前になるだろうか、日本にセンセーショナルな言葉が輸入されてきた！

その名は「スローフード」。イタリアで10年以上前に誕生した造語だ。

私は以前ホクレンにおり、北海道の農畜産物をPRする広報宣伝の仕事に9年間携わった。特に後半の6年間はGReenという情報誌の編集長として農家の人たちを取材するために北海道内を周った。

その中で年々離農者や遊休地が増えていく様を数字だけでなく、実際に目の当たりにし、自分の中で漠然とした不安が募っていった。バブルもはじけ、優良だと思っていた企業も突然に倒産し豊かさの概念が木っ端微塵となった頃だった。

都会にあこがれていた私が農村へひかれ始めてきた頃、突如出会った「スローフード」という言葉。

私がこの言葉に出会ったのは、確か5年くらい前だっただろうか。

何気なく入った喫茶店で珈琲を飲みながら眺めていた雑誌の一紙面に目がとまった。その雑誌は東京発のファッション誌というか情報誌だったので、食いしん坊の私は「ゆっくり食べるイタリアの店の特集かな？」と思いながらペラペラめくっていった。

読んでいくうちに「ん？どうやらちょっと違うぞ」、そして読み終えたあと「どうやらイタリアで食に関して何

かが起こっている。でもこれって他人事じゃないな」と。

その本を即購入したわけではなかったし、問い合わせもしなかった。でもそれから何故か「スローフード」という言葉が頭にこびりついて離れなかった。

その後「スローフードな人生！」という本と著者の島村菜津さんとの運命的な出会いがあった。そしてイタリアや九州へ同行させていただいた。田舎を旅しながら農村民泊で手作り料理のお手伝いをしたり、各国のスローフーダーの話を聞いたり、昔話やお国自慢話をしたり…もともと農村に興味があって周っていたこともあって、個人的にもこんな生活を何度も繰り返すうち、最近やっと少しづつではあるが自分の中にスローフードの意味がわかりかけてきたような気がする。

北海道のスローフードを語るとき「これがスローフードなんです」というはっきりしたことを今の私にはいえない。しかし、自分が現段階で理解している範囲内で「もしかしたら、こういうことかもしれないのでは？」と感じていることを紹介していきたい。

北海道のスローフードは？

○福島町の飯ずし

400年以上の歴史のある道南の町、福島町の福島大神宮の宮司さんの家にお世話になったときの話である。

朝ごはんに「頂き物だけどとってもおいしいのよ」と言って、出てきたのは鮭の飯ずしだった。神社の炊き出し隊長である80過ぎのおばあちゃんが毎年ご近所に配るために飯ずしを作っているそうだ。その数、大きなパックで150近いという。

神社の炊き出しは今でこそ少なくなったが、それでも年に6回はある。みなそれぞれの自家菜園で野菜を植え、それらを引っこ抜いて神社まで持っていき、料理をする。

「土つきで形もそれほど良いものじゃないけどね、愛情こもっているし農薬はかかっていないし、味は最高ですよ」と宮司さん。また、札幌生まれ札幌育ちの奥様は「この前ね、ニシン漬けの味を褒められたの。『福島町の味ですよね』と言われたときはうれしかったわ」と笑顔で話してくれた。

さて、飯ずし。これは買って食べられるもんじゃありません。料亭で出て

きそうな品のいい、でもほのぼのとした味がした。な、なんと山椒が入っている。「山椒入っているの、初めてです」というと、宮司さんは「境内に山椒の木があるんだよ」と教えてくれた。多分、おばあちゃんは秋に山椒の実を採りに来ていて、いつの頃からか飯ずしに入れたのだろう。

地域の人を思いながら作る地元ならではの味を次世代に伝えているおばあちゃんこそ、真のスローフーダーであろう。

中央にあるのが飯寿司　とっても美味！

○旭川市西神楽のいとこ煮

先日、地元学で有名な結城登美雄さんを迎えるにあたり、自分たちで植えた酒造好適米・吟風を使った純米酒「風のささやき」とお母さんたちの手料理を持ち寄って歓迎しようということになった。私も少し早めに入って手伝うことを名目につまみ食いしながら料理を教わった。

夕方から始まる会に向け、昼からお母さんたちは準備でおおわらわ。きんぴら、おから、漬け物、煮付け、ポテトサラダ、あげいも、おむすび、羊羹…何品集まったろうか、ざっと20品はくだらない。1品もって来る人もいれば5品くらい持ってくる人、すこし砂糖が大目なお母さんや薄味気味なお母さんなどなど、味付けもそれぞれに個性があってそれぞれにおいしい。準備をしながら味見して、レシピの話などで盛り上がっているお母さんたちはイキイキとしていて、本当に楽しそうだ。

その中でも加齢美会という65歳以上の女性部の方々が作ってくれた「いとこ煮」は絶品だった。

11月にあるお寺の行事には毎年必ず作っているというこの「いとこ煮」

西神楽のおふくろの味が集合

おいしいよと煮つけを差し出す　お母さん

は、西神楽の人にもあまり知られていないという。てっきりかぼちゃと小豆の煮物かと思いきや、ごぼうやにんじんなどたっくさんの根物野菜と小豆がたっぷり入った汁物だった。野菜のやさしい甘さとほんのりとした香りをこわさないような薄味の味噌仕立てで、心和むような味がした。

いとこ煮を食べながら昔の話を聞いたら、箱寿司やかぼちゃのおじやなど料理の話から農作業や暮らしぶりにまで話は至りいつまでも尽きることはない。結城さんも「こういった集まりは本当にうれしいよな、楽しいよな」と食べては語り、聞いては食べていた。

そんな中「昔はよく、こうやってみんなで持ち寄って食べていたのよ」と話すおばあちゃんの昔を懐かしむ中に一瞬さびしそうな笑顔が今も忘れられない。

この日は食卓を囲み、地元の人も余所者も、お兄ちゃんからおばあちゃんまで、集い、語らい、飲んで、笑った。これがきっかけとなって地域の人たちがもう一度つながり始めている。

これがいとこ煮

農村の桃源郷？

友人が春から就農する。旦那さんの

実家が農業を営んでおり、そこに公務員生活を10年以上やってきた2人が農業をやりたくて帰るのだ。

「確かに大変なこともあるけれど、お父さんやお母さんの知恵にいっぱい出会えて教えてもらえることは本当に幸せだと思うんだ」と話す。30過ぎた就農は心身ともに厳しいであろうが、彼女は希望に満ち溢れている。いつも手料理でもてなしてくれて、私はお裾分けを頂いている。

ある日家庭菜園とか自家菜園の話をしていたら「私たちが帰ることが決まった途端、お母さんたら自家用野菜のハウスを大きくしていて。あなたたちの分も作らなくっちゃって。すーごくうれしかったの」と話してくれた。

十勝で畑作4品をコツコツ作る真面目な農家のお母さんの話である。今まで2人で過ごしてきた食卓が4月から4人になるのだから、何より家族の食を考えるのは至極当たり前のことなのかもしれない。

取材を重ねているとどんな農家であれ、必ず自家用ハウスがあってパッチワークのように多様な作物が植わっている。これらの管理は大概お年寄りかお母さんたちだ。

家族を思い、食卓に並ぶ料理を考えて植わっているこのハウスにこれからの日本・北海道のあり方が隠されているような気がするのは私だけだろうか。

私のスローフードとの戦い？

こういった人たちに出会い始めて、私は食べ物に対する、そして家族に対する、自然に対する考えがチョコットずつ変わったように思う。

例えば、味噌や梅、漬け物はもちろん子どもの頃から現在もなお、手作りや家庭菜園に精を出していたり、山菜やきのこを取りに行ったりする両親を今まではそれほど偉いと感じてこなかった。

小さい頃から合成洗剤を使わず、洗濯石鹸・石鹸シャンプーを使っていた

友人が腕を振る舞ってくれた豆乳鍋、黒米のおむすび、麻婆豆腐にお漬け物

こともあって、真っ白に洗いあがらず、髪の毛もサラサラしないことに苛立っていたこともあった。大人になって、シャワーや洗濯などの何気ない行為が自然を汚しているかもしれないとやっと理解できて自分自身の問題として受け入れ、行動に移せたのはごく最近のことである。

自給力・生活排水にまで気を配り生活するということは、私にとって何よりも大変なことだ。今でも常にその誘惑と戦っている。それを何十年も前からやっていた両親は、自分の家族が健康で元気に過ごすためにしてきた愛情から生まれたものなのだということも実感し、この年になって恥ずかしながらその偉大さに気づくようになった。その足元の当たり前の凄さに気づかせてくれたのは、農村で出会ったおばあちゃんやお母さんたちだ。

中富良野の農家で出された疲れた体とペコペコの胃を満たしてくれたカボチャ団子入りぜんざい

スローフードの行く末は…

最近「スローフード」という言葉だけが一人歩きし、本来の意味を理解されていないまま皆に飽きられて捨てられてしまうのではないかと危惧している。スローフードな店、スローフーダー…どうも日本人は横文字が好きなのか、言葉に頼りすぎるというか、言葉遊びをしている感も否めない。

でも、この「スロー」という言葉に今まで食や農に感心の持たなかった人たちが反応してきているのは事実である。そうであるならばこの言葉の意味をしっかり伝えて、自分自身を振り返る人が増えていくことに大きな意義があると考えている。

スローフードとは、食べることにきちんと目をむけていくことで、自分と家族、自分と自然、自分と社会との関係を見つめ直していくものだと思うのだ。「スローフードとはゆっくり食べるってことじゃなくて、食べることをきっかけに自分と周りとの関係を見直すこと」。ということは、グルメの会じゃなくって毎日の食事をどう食べる

かってこと。まず自分から始める、始められることなんだと。

　抽象的な「北海道はこうあるべき」論とか、自給率の低さに嘆き悲しむのではなく、自らの自給力を高めていくことから始まる。そして具体的な例は、案外自分の足元にある家庭や友人が持っているものかもしれない。

グリーンツーリズムの実践から見えたもの

三田村　雅人（みたむら　まさと）
ふれあい体験農園みたむら園主

はじめに

大地と言う言葉が似合う北海道。厳しい自然と闘ってきた農業の姿がそこにあります。しかしこれまで北海道経済を支えてきた農業にもかげりが見え始めてきました。何よりも後継者が育たないことに危機感を感じています。農家は広大な農地を所有した故、生産量を増加させることのみが豊かさへの追求となりました。しかし仕事の忙しさに没頭された生活は、小さな子供心に「農業なんて」と言う思いを植え付けました。生きる要である食を担う農業が社会に認められていないのか…。生産者、消費者と分業されてきた食の業界に疑念を持ち、新たな価値観で農村を見つめなおす必要があります。

時代は物の消費をするだけの社会から自然や環境と共生する時代への変革を迫られています。その切り口がグリーンツーリズムの中にあることを検証していきたいと思います。

「由仁ふれあい農業小学校」の開校

「由仁ふれあい農業小学校」は農業体験を通して自然の仕組み、農業の役割、命の大切さを学ぶ体験教室です。小さな種を蒔き育て、豊かな実りを迎える感動を、学友みんなで共有しましょう。

上記の目的で私設農業小学校を開校しました。5月から10月までの半年間、隔週で12回農園に通いオーナー畑を耕します。「手汚しませんか」と言う新聞記事の募集にたくさんの応募があ

りました。あえて一緒に手を汚しましょうとの呼びかけに、都市の生活者が振り向いてくれたのです。

これまでの2年間に81組140名が参加しました。グラフを見て判るとおり参加形態も様々です。年齢別に分けても若い世代の参加があることにも注目できます。誰にでも参加できる。世代を超えた関係があることでより体験が深まるのです。

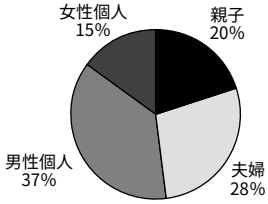


図1　農業小学校参加者・参加形態

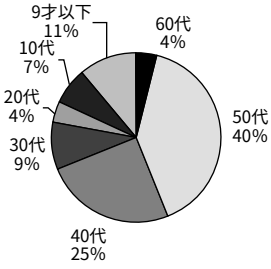


図2　農業小学校参加者・年代別

参加に至る動機から農業に対する思いを分析したいと思います。

子供連れで参加する家族は、両親のどちらかが農村で育ちその原風景を自分の子供たちに伝えたいと言う思いがあります。また育ち盛りの子供たちの食べ物に対する関心が強くあります。子供には好き嫌いが少なからずあります。特に野菜を食べない子がたくさんいます。でも自分たちの手による野菜作りを通して野菜が食べられるようになりました。野菜独特の味が敬遠されるのですが、新鮮であり自分が手がけた愛着によって体が受け止める野菜になるのです。

女性の参加者は、食の安全について一番関心があります。農業小学校の野菜づくりは化学肥料や農薬を使いません。慣行の栽培と違い、農薬や化学肥料を使わないことがどう影響するのか自分の目でたしかめます。手がけた野菜が時には病害虫の被害に遭い収穫に至らないこともあります。単に農薬を使わないだけの安全を求めてはいけないことに気付くのです。またデフレと言われる時代でも、安さだけに価値を求めると見失うものがあることに気付きます。

男性の参加者は、定年後の第二の人生を菜園作りに夢見ている方が多数です。何不自由ない都市生活に思えます

が「アスファルトの上では地に足がついていない感じがする」と言っています。疲れを癒すための場としての菜園作りと農村生活を求めているのです。鍬を振るう作業などは額から玉の汗が流れ落ちます。しかしそれは、今までにかいたことのない清々しい汗だと言います。

農業小学校年間プログラム
1回目：入学式、畑の耕起と種まき
2回目：アジア・アフリカ支援米の田植え、苗の移植
3回目：雑草取り、間引き
4回目：添え木立て、わき芽取り
5回目：課外授業（しいたけ栽培）
主な野菜の収穫期
6回目：小麦刈り、収穫された野菜で昼食
7回目：製粉、うどん作り
8回目：堆肥作り、秋野菜の種まき
9回目：稲刈り
10回目：収穫祭
11回目：課外授業、りんご狩り
12回目：畑の後片付け
終了式：

私がその辛さを気にするまでも無く「きもちいい」と言う言葉が返されます。

プログラムの中の各体験から何を感じてきたのか考察します。

土に触れる

一見無機質に見える畑の土ですが、参加者から「ふかふかして意外とやわらかいね」と言う感想がもれます。未開の土と違い、長年にわたり人の手によって耕し続けられた肥沃な畑の土だからです。ミネラルを豊富に含み、微生物がたくさん住む土が健康なのです。だから汚れなどありません。先人の苦労に畏敬の念をいだきます。

種蒔き

野菜によって種の形もまちまち。一粒をつまむことも出来ない小さな種があります。それを同じような砂粒に混ぜて蒔いてみましょう。均質に蒔く事が出来ます。ちょっとした知恵です。

発芽の条件には水分・酸素・温度が必要です。条件さえ整えば芽が出ます。「素人が蒔いた種だから」と言うことは決してありません。自分の蒔いた種が芽を出す。こんなに緑がいとおしく感じることはあったでしょうか。とても感動します。

育てること

作物は短い夏に必死に成長します。菜園は野山の植物と違い人の管理下にあります。たとえば雑草。そのままにしておくと作物は負けて育ちません。常に手入れが必要となります。病気もあります。発芽してすぐ罹病する「タチガレ病」。せっかく蒔いた種が発芽と同時に枯れていきます。悔しい思いをします。しかしリセットが利くのも菜園の良いところ。気を取り直して蒔きなおします。

虫がつき食べるところが無くなりそうな時があります。虫をつぶしてしまうのは残酷に思う。しかしそのままだと収穫できない。私たちはこの自然とどこかで折り合いを付けなければいけません。その場でつぶしてしまうことも、どこかの草むらに放すこともどちらも正しいと思います。ある生物が息

絶えることで次の生命が育まれる。自然界の生き物は土へ返りながら命の循環を繰り返します。視野の中に憎き害虫のみが映し出される時は農薬を使用するでしょう。ただ怖いのは害虫も益虫も皆殺しにしてしまうことです。菜園での私たちはその選別が出来ます。手で虫を取るという忙しい時代に根気の要ることですが、このことによって私たちがこの自然によって生かされている事が知り得るのです。

収　穫

自分で育てた野菜の収穫は格別の思いがあります。野菜作りをはじめて「日々の天気が気になるようになってきた」と言います。晴天が続けば水やりの心配があり、雨が続けば作物が流されないかと心配になります。四季や日々の天候が食べ物と密接に関係していることがわかると、食や農に対して新しい価値観が生まれます。家族では食べきれないほどの収穫を得ることもあります。その時はとなりの菜園で取れた野菜と物々交換をしたり、料理の工夫をすることで食べきります。もったいない精神も旺盛となり、調理くず

や食べ残しも少なくなったと聞いています。

そう、この菜園の野菜たちには物語があるのです。一人一人の思いが形になり実を結んでいきます。生産、消費などと言う原因と結果の追求だけではありません。畑があり、種蒔き、発芽、生長、開花、結実、収穫、食べる、そして私たちが生かされる。ひとつの事象を一緒に歩む事で生まれる物語づくりが展開されているのです。

学校と名づけた訳

過去トマトやとうもろこしの収穫体験のみに取り組んだ時期がありました。それぞれのお客様は、その自分で収穫する新鮮な野菜に大満足です。しかし複数のお客様が一つの畑に入ったとします。お客様同士のコミュニケーションが一切無いのです。ある意味、われ先に良いものを取ることに真剣になります。私としては限られた収穫量の野菜を前に「奥の方に真っ赤なトマトがありますよ」的な会話を求めたいのです。出来た物だけの価値で選ばれるのなら独占的な欲も仕方ありません。しかし前述した通り野菜が実るまでには物語があるのです。それを理解するならば状況に応じた節度ある対応を求めたいのです。

強い弱い。多い少ないを競い合うものではありません。「農業小学校」とあえて名前で敷居を低くし、大人から子供まで一緒に学び分け合う取り組みにしたかったのです。また農業小学校は野菜作りを教える先生役が農家の私です。しかし野菜作り以外は先生役の私が学ぶことも多いのです。教え教えられる立場でも、物を見つめる視線を一緒にすることが大切です。

最初は参加者とプライベートな話はしません。しかし農園へ通う回数が増えて打ち解けてくると居残り組が出てきます。ここからがまた楽しく充実したひと時の始まりです。汗を流した後のホッとする空間。自分をさらけ出し本音の会話になります。相手の事が判らないと嘆くことがあります。ではそ

の時その相手に自分自身をどれだけ伝えていますか。コミュニケーションを深めるには、自分を伝えることからはじめないといけません。なぜか土の上ではさりげなくそれが出来るようになります。

価値観を共有することと共に参加者のコミュニケーションは各段に深まります。「また来年も合いましょうね」と期待を胸にした会話。人と人とを結ぶツールとして農村・農業体験を生かしていただきたいと思います。

基本概念

「身土不二」と言う言葉があります。「人と土は一体である。人の命と健康は食べ物で支えられ、食べ物は土が育てる。故に、人の命と健康は土と共にある」と言う概念です。先人は四里四方の中で作られた食べ物によって命を保つと言いました。しかし今の日本人の食卓はどうなっているでしょう。地球の裏側からも食糧を輸入している現実。その量も国内消費量の6割に上ります。これを豊かさの象徴とするか、矛盾と捉えるかで大きな差が出てきます。人々が農耕をはじめてから数千年にわたるゆっくりとした食の変貌。しかしここ数十年の劇的な変化は、残念ながら健康を脅かす病気の増加と一致します。

私たちが捉える自然観とはどのようなものでしょう。「人の存在しない自然の中に一人入り込むと恐怖に襲われる」と聞いたことがあります。では農業・農村と言う自然の中に入った時の気持ちはどうでしょうか。そこにある物は人が介在している自然です。だから心が癒されるのです。母のおなかにいる赤ちゃんのように、私たちの体はこの大地によって守られ生かされているのです。前述のように畑の中で本音を語れるようになるのも、目に見えない「気」に包まれているからではないでしょうか。

グリーンツーリズムを語るキーワードとして「身土不二」と言う言葉を添えたいと思います。

課題点の整理

前述のとおり、農業・農村での体験が肉体的・精神的に様々な変化をもたらします。今まで気付かなかった食の豊かさ。心地よい汗。癒される心。こ

れからはこの事にどう市民が気付いて行き広がりを見せるかが課題です。

ここまで分業化された社会構造。田舎を知らないで育った都会生まれの都会育ち。田舎に育ちながらも都会に対するコンプレックスを持つ人たち。双方を引き合わせるコーディネーター役の存在が必要です。その為にはまず農村に住む人たちがその計り知れない価値をどう見つけ理解するかにかかっています。ここにあるのは農村景観を見下ろす観光ではありません。人が介在していることが肝心です。人と人との出会いが肝心なのです。趣旨を理解するプロの存在が待ち望まれます。

グリーンツーリズムの形態は様々です。産地の取れたて野菜を売る農家の直売・ファームインを利用した滞在型の体験・自分の手でもぎたてを味わう収穫体験・一緒に農産加工を体験する・農家レストランでの食事など様々

です。ビジネスとして取り組むことも大切です。しかしハードにお金をかけ過ぎると都市との差がなくなります。今あるそのままの資源を再構築してゲストを迎えることが大切です。農業にも様々な可能性が出てきました。希望をもった人材の発掘に努めなければいけません。

各地で都市と農村が一緒に楽しみ癒される関係作りが増えて欲しいものです。必ず第一次産業の底上げに寄与するものと信じます。

終わりに

農業体験を契機に自宅のプランターで野菜作りをはじめた人。本格的な菜園作りをはじめた人。第二の人生を農村でと決心した人。将来は農家である実家に戻ろうかと考えはじめた人。栄養士の方が食に対する理解を深め仕事に活かしています。娘の夢であるレストランの開業に、自分たちの作った野菜を届けたいと本格的に野菜作りをはじめた方もいます。グリーンツーリズムは普段の生活、普段の仕事、将来の夢にさりげなく入り込んで行きます。

今後グリーンツーリズムの概念は福

祉や教育の中にも取り込まれて行くでしょう。園芸を通した楽しさや喜びは障害を持つ人たちのリハビリに大変効果があります。総合的な学習の時間に取り込むことで、子供たちの自然への透察力と生きる力を育むことが出来ます。また、Iターン、Uターンの動機付けになっています。定住人口が増えることや就業者の増加は地域経済を活性化させる原動力になります。

　グリーンツーリズムを通じた私たちの生活。多忙な社会の中でも自分を見つめなおし、人と自然から知恵を学び、それぞれがゆるやかに融合しあう中で新しい豊かさをつかむことが出来るのです。